

ニューズレター

4月29日●「新宿御苑みどりフェスタ&国立公園フェア」の様子



観察会の様子



ねんどでたくさんの生き物を作りました

6月6日~7日●「エコライフフェア2009」の様子



クイズラリーを開催!



土の中の生き物を観察



CONTENTS

- 生物多様性まつり2009 P2~P3
- 国際ワークショップ P4~P5
- モニタリングサイト1000の動き P6~P7
- いきものみつけ P8~P9
- センターの出来事 P10
- 標本の紹介(第17回) P11

生物多様性センターの 普及啓発のためのイベント活動

生物多様性とその保全の大切さを一人でも多くの人々に理解していただくため、生物多様性センターはインターネット、施設展示、各種イベント等を通じて様々な普及啓発活動を実施しています。

特に春から夏にかけては、「みどりの月間」、「環境月間」などの期間中、各地で開催された行事で、生物多様性センターは普及啓発活動を実施してきました。また、8月には恒例行事である生物多様性まつりを「いきものさまさま!私の暮らし」をテーマに開催いたしました。

これらの催しでは、生物多様性保全に関するパネル解説だけでなく、楽しく参加できるようにクイズを盛り込んだ環境学習や身近な生きもの観察を行い、多数の方々に参加いただきました。本号ではこれらの活動を集めて紹介いたします。

「生物多様性まつり2009」を開催しました

生物多様性センターでは、毎年恒例となっている夏のイベント「生物多様性まつり」を8月2日に開催しました。このイベントは、生物多様性やその保全の重要性について楽しく学んでいただくため生物多様性センター主催で行っている普及啓発事業で、今回で10回目となります。今回のテーマは「いきものさまざま!私の暮らし」。生き物(生物多様性)と私たちの暮らしのつながりを題材として、展示や参加型イベント行いました。そのプログラムの内容をご紹介します。

●企画展示「いきものさまざま!私の暮らし」

私たちの生活は生き物(生物多様性)のめぐみによって支えられているということを、パネルと見て触って学ぶことのできる展示の二段組みで紹介しました。「くらべてみよう森とはげ山」の模型では、木が生えていない荒れ地を表現した「はげ山」と森林に、実際に水(雨)を降らせることで、洪水が起きやすいのはどちらかを体感してもらいました。



「くらべてみよう!森とはげ山」の模型

●森の中のおそうじ屋さん

森が動物のうんちや死がいがいっぱいにならないのはなぜ?それは土の中の生き物たちがいるからであり、これらの生き物は生物多様性になくてはならない存在なのです。そんな土の中の生き物たちに焦点をあて、どのような役割をしているのかを紹介したコーナーです。様々な生き物の活動によって分解されていく魚の様子を見ることのできるパラパラ写真集や小さな生き物たちの顕微鏡観察を行いました。普段じっくり見ることのない生き物たちの動きに、お子様から大人の方まで興味津々でした。

●ハンカチの草木染め

生物多様性センターの敷地内にある染め物に使える植物の観察の後、白いハンカチに輪ゴムや割り箸を使用して模様をつけ、草木の煮汁でハンカチを煮る事と薬品で色を定着させる事を繰り返し、ハンカチを染めました。輪ゴム・

割り箸を外すまでどのような模様がついたのか判らないため、開く際に、様々な歓声が挙がっていました。



きれいに染まったかな?

●スズタケで作ろう

いきものの恵み、里地里山の利用の例として、スズ竹を使ったお皿の作成を体験してもらいました。スズ竹などの竹や笹は、弾力性があり、丈夫で軽く、水に強いので、各地で地元の笹や竹を編んで作った様々な形の生活用具や農業・漁業の道具が利用されていました。富士勝山スズ竹伝統工芸センターの名人の指導により、小学校低学年のお子さんから大人の方まで、皆さん熱中して作業されていました。竹製品の便利さ、里地里山の保全と利用について考えていただくきっかけになればと思います。



「名人」が優しく指導してくれました

●人工衛星を使って宝物を探せ!

ハンディGPSを使用して、指示された地点の宝物(観察キットや植物・昆虫ミッションシート)を探し、さらにミッションシートで指示された植物・昆虫のスケッチを、センター周辺地図の植物・昆虫を見つけた位置に張り付け、「生きもの地図」を完成させました。

アジア太平洋地域における生物多様性モニタリングのネットワーク化のための国際ワークショップ

1 開催の経緯

気候変動や人為的改変、物・人の移動の広域化・高速度に伴い地球規模での生態系の劣化が問題となっている現在、国境を越えて生物多様性の観測体制を確立し、様々なデータの収集・分析を行って、その変化を的確に把握、評価し保全施策に結びつけていくことが不可欠です。

なかでも、日本が属するアジア太平洋地域は、豊かな生物多様性を有するものの、その基盤情報の収集整備が遅れており、人為的改変や地球温暖化に伴う生物多様性損失の実態を的確に把握することが緊急課題となっています。



会場風景

2 開催の目的

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が2010年に愛知県名古屋市で開催されることを踏まえ、アジア太平洋地域での生物多様性観測の現状と課題を明らかにし、当該地域での生物多様性観測の強化とネットワーク化を図るとともに、それらの繋がりの中で日本の果たすべき役割を探ることを目的としています。



名古屋大学 副総長 渡辺芳人 教授の開会挨拶

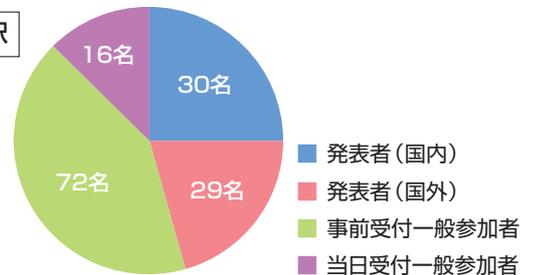
3 開催結果

平成21年7月21日(火)と22日(水)の2日間にわたって、名古屋大学(愛知県名古屋市)において、このワークショップは開催されました。参加した国はインド、インドネシア、オーストラリア、韓国、タイ、中国、日本、パラオ、フィジー、フィリピン、ベトナム、マレーシアの12カ国。参加した国際機関は生物多様性条約(CBD)事務局、地球観測グループ生物多様性観測ネットワーク(GEO-BON)、ワールドフィッシュセンタ

ーの3機関。一般参加を含め、2日間で合計147名の方々にご参加をいただきました。

初日の午前中はGEO-BON日本委員会代表 矢原徹一氏(九州大学大学院教授)による基調講演をはじめ、関係国際機関であるGEO-BONやCBD事務局から生物多様性観測のネットワーク化の重要性についてのインプットがありました。午後と2日目の午前中には分科会を行い、国内外の研究者が各テーマ毎の各国における現状と課題を発表しました。これらの現状と課題を受けて、2日目の午後にはアジア太平洋生物多様性観測ネットワーク(AP-BON)推進のための戦略骨子の作成が行われ、今後の活動に向けての方針が検討されました。

参加者内訳



4 今後の展開

このワークショップで作成されたAP-BON推進のための戦略骨子をもとに、各国・各国際機関とアジア太平洋地域における生物多様性観測の戦略と行動計画を作成していきます。また、アジア太平洋地域生物多様性観測概況集の作成や統合的生物多様性データベースの構築を行い、COP10で議論されるポスト2010年目標の達成状況の評価に貢献するほか、その他の生物多様性保全施策へ科学的基盤情報を提供していくこととしています。

このワークショップについての詳しい情報・講演資料等は、下記ホームページ

「<http://www.biodic.go.jp/gbm/gbon/index.html>」
でご覧になれます。



International Workshop for Networking Biodiversity Observation Activities in Asia Pacific Region
July 21-22, 2009

集合写真

プログラム

7月21日(火)

午前(全体会合)	
◎基調講演	GEO-BON日本委員会代表 矢原徹一(九州大学大学院教授)
◎GEO-BONについて	Dr. Gary N. Geller, Deputy Manager, NASA Ecological Forecasting Program, Steering Committee of GEO-BON
◎CBDにおける科学基盤情報の整備の必要性	Mr. Kalemami Jo Mulongoy, Principal Officer, Scientific, Technical and Technological Matters, Secretariat of Convention on Biological Diversity
◎アジア太平洋地域生物多様性観測のネットワーク化に向けて	環境省生物多様性センター 阪口法明(総括企画官)
午後(分科会1:陸域及び海域における観測活動の現状と課題)	
会場1(陸域)	会場2(海域)
座長:中静 透(東北大学) Dr. Barry Brook(Australia) 発表者:(12名) Dr. Haigen Xu(China) 日浦 勉(北海道大学) Dr. Eun-Shik Kim(Korea) 鈴木英治(鹿児島大学) Dr. Dokrak MAROD(Thailand) 大崎 満(北海道大学) Dr. Jaya R. Veerasamy(Malaysia) 熊谷朝臣(九州大学) 村岡裕由(岐阜大学) 山形与志樹(国立環境研究所) 奥田敏統(広島大学) 藤間 剛(森林総合研究所)☒	座長:白山義久(京都大学) Dr. Chandramohan (India) 発表者:(11名) 伊勢戸 徹(京都大学) Dr. Somchai Bussarawit (Thailand) Dr. Tran Duc Thanh (Vietnam) Dr. Chandramohan(India) 松浦啓一(国立科学博物館) Dr. Marie F. Nievaes (Philippines) Ms. Noelle Oldiais (Palau) Mr. Akuila Cakacaka (Fiji) 木暮一啓(東京大学) 山野博哉(国立環境研究所) 山本啓之(海洋研究開発機構)

7月22日(水)

午前(分科会2:横断的テーマの現状と課題)	
会場1(評価・予測及び保全・再生)	会場2(インターフェイス及びGIS)
座長:竹中明夫(国立環境研究所)・ Dr. Dedy Darnaedi 発表者:(8名) 角谷 拓(国立環境研究所) 永田尚志(新潟大学) Dr. Eric Baran (Cambodia) 小池文人(横浜国立大学) 松田裕之(横浜国立大学) Dr. Dedy Darnaedi (Indonesia) 西廣 淳(東京大学) Dr. Nik M. Majid (Malaysia)	座長:伊藤元己(東京大学) Dr. Ma Keping(China) 発表者:(7名) 大手信人(東京大学) Dr. Ma Keping (China) 海老原淳(国立科学博物館) 松永恒雄(国立環境研究所) 山本勝利(農業環境技術研究所) Mr. Rodrigo U. Fuentes (ACB) 伊藤元己(東京大学)
午後(全体会合)	
◎講演	辻本哲郎(名古屋大学大学院教授)伊勢湾流域圏プロジェクト代表者 「伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発プロジェクト ～陸域-海域をつなぐ生物多様性と生態系管理～」
◎テーマ1のまとめと課題の整理+質疑	陸域:中静 透 海域:白山義久
◎テーマ2のまとめと課題の整理+質疑	評価・予測及び保全・再生:竹中明夫 インターフェイス・GTI:伊藤元己
◎AP-BON設立及び推進に向けた課題の解決のためのアクション	進行:矢原徹一、中静 透
◎AP-BON推進のための基本戦略の作成	進行:矢原徹一、中静 透
◎ワークショップのまとめ	矢原徹一

モニタリングサイト1000の動き

1 モニタリングサイト1000陸水域調査について

「陸水」とは「海洋」に対する言葉で、陸に囲まれた水域のことです。モニタリングサイト1000陸水域調査では、全国の湖沼および湿原を対象に、植物や水質などの調査を実施しています。

昨年度、専門家を委員とする検討会を開催して、モニタリングサイト(継続して調査を実施する地点)を計30箇所選定しました。

みなさんのお住まいの地域に、以下の湖沼や湿原がありますか？

■湖沼サイト(計20サイト):淡水湖沼は、以下14サイト。摩周湖、阿寒湖、支笏湖(以上、北海道)、宇曾利山湖(青森県)、伊豆沼(宮城県)、猪苗代湖(福島県)、尾瀬沼(群馬県)、霞ヶ浦(茨城県)、山中湖(山梨県)、木崎湖、諏訪湖(以上、長野県)、琵琶湖(滋賀県)、多鯰ヶ池(鳥取県)、池田湖(鹿児島県)。汽水湖沼は、以下6サイト。能取湖、厚岸湖(以上、北海道)、小川原湖(青森県)、澗沼(茨城県)、三方五湖(福井県)、中海・宍道湖(島根県)。

■湿原サイト(計10サイト):サロベツ湿原、大雪山、釧路湿原(以上、北海道)、八甲田山湿原(青森県)、八幡平(岩手県、秋田県)、尾瀬ヶ原湿原(福島県、群馬県、新潟県)、戦場ヶ原湿原(栃木県)、霧ヶ峰湿原(長野県)、鯉ヶ窪湿原(岡山県)、花之江河湿原(鹿児島県)。

今年度は、調査手法を検討しつつ、伊豆沼、霞ヶ浦、琵琶湖、中海・宍道湖の4湖沼サイト、サロベツ湿原、釧路湿原、八甲田山湿原の3湿原サイトにおいて、試行調査を実施しています。

試行調査の内容は、湖沼ではヨシのバイオマス(生物量)、植物プランクトン(クロロフィルa 濃度)、透明度などを調査します。また、湿原では植生、地温・気温、地下水位などについて調査を行います。

私たちの身近にある湖沼や湿原は大切な水を蓄えるのと同時に、多くの特有の動植物が生息・生育しています。これら湖沼や湿原をモニタリングしていくことによって、地球温暖化をはじめとする生態系の異変を早期にとらえることができると考えられます。

例えば、地球温暖化によって湿原からの蒸発量が増加し、乾燥化することで、湿原植生が変化することが考えられます。また、湖沼でも植物プランクトンの持っている葉緑体の一つであるクロロフィルa は、光合成に不可欠な色素です。これを調べることで、湖沼生態系の生産者として大きな役割を果たしている植物プランクトンのバイオマスを測定することができます。

今年度の調査結果を基に、調査マニュアルを作成し、モニタリングサイトに選定した他の湖沼・湿原でも調査を実施していく予定です。



【湖沼調査】湖底の水を採取する「北原式採水器」



【湿原調査】地温・気温を測る計測器(撮影:NPO法人 日本国際湿地保全連合)

2 高山帯調査を開始しました

高山帯は寒冷な気候であり、そこに生息・生育する生物も独特です。そのため、地球温暖化の影響を顕著に受けることが懸念されています。

モニタリングサイト1000では、新たに高山帯に調査サイトを設置するため、昨年度、調査サイトや調査対象について検討しました。その結果、大雪山、北アルプス(立山等)、白山、南アルプス(北岳)、富士山の5サイトを選定しました。今年度は、南アルプス(北岳)及び白山で試行調査を行っています。



南アルプス(北岳) 調査地に向かう途中の大樺沢
高山帯の調査は容易ではない。

南アルプスは、日本第二位の高峰北岳を有し、日本では最も南に位置する高山帯です。このため、チョウノスケソウなど、氷河とともに南下してきた植物の生育地の南限になっています。また、キタダケソウは北岳のみに生育する固有種であり、北岳の象徴にもなっています。



キタダケソウ

モニタリングサイト1000ではこのキタダケソウの生育地や高茎草原に1m×10mの永久方形枠を6月に設置しました。この中を更に10×10cmのマスに分け、この中に出現する全ての高山植物種を調べることで、植生の変化を定量的に把握します。例えば、地球温暖化により気温や積雪量などが変わると、出現する植物種が変化する可能性が考えられます。また、キタダケソウなどの開花時期などを調べるために、インターバルカメラを設置し、自動撮影を行っています。

地球温暖化により開花時期が早まることが予想されるため、今後、その変化に注目していきます。この他、高山植物の花粉を運ぶチョウ類の調査等を行っています。

白山は、高山植物の宝庫として知られ、ハクサンシャクナゲ、ハクサンフウロなど「ハクサン」の名がつく花々が約20種も生育しています。また、白山は日本で最も西に位置する高山帯であり、比較的面積が小さいことから、地球温暖化の影響を受けやすいと考えられます。



白山 永久方形枠
枠は、調査時にのみ植生の上に置いている。
(石川県白山自然保護センター提供)

白山の調査では7月から調査を開始し、雪渓から続く雪田植生など、より地球温暖化の影響を受けやすい場所に永久方形枠を設置しました。この中では、クロユリやハクサンコザクラなどが見られました。白山では、開花時期やチョウ類調査に加え、地表を歩き回っている甲虫類の調査を行いました。地表性の甲虫類はあまり移動しないため、温度や水分など、その環境変化に対する感受性が高いと考えられています。本年の調査では、オサムシ類やシデムシ類などが確認できました。



白山 インターバルカメラ
クロユリの開花状況を自動撮影している
(石川県白山自然保護センター提供)

今後、この試行調査の結果を基に調査手法を改善するとともに、調査頻度等を決定し、来年度から本格調査に入る予定です。

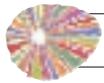


いきものみつけ
www.mbr44.jp

2009年度調査がスタートしました!

市民参加のいきものしらべ「いきものみつけ」の2009年度調査が6月からスタートしました。今年度は対象種を増

やすとともに、ホームページもリニューアルしましたので、多くの方のご参加をお待ちしています!



対象生き物は30種

対象の生き物を大幅に増やし、30種になりました。皆さんの身近なところで見られ、また季節を代表する生き物ばかりですので、お家の庭や公園、通勤・通学の途中でこれ

らの生き物を見つけたら、ぜひご報告ください。生き物を通して季節の訪れを感じてみましょう!

2009年・夏 15種



アメリカザリガニ



ツマグロヒョウモン



カブトムシ



ニホンカナヘビ



クマゼミ



アブラゼミ



カッコウのさえずり



ゲトウの花

その他のいきもの

- ナガサキアゲハ
- ノコギリクワガタ
- ミヤマクワガタ
- クズの花
- エゾシロチョウ
- アオスジアゲハ
- エゾハルゼミ

2009年・秋 3種



ヒガンバナ



ナナカマドの紅葉



イチョウの実

2009年・冬 2種



ジョウビタキ



ヒキガエルの卵

2009年・春 10種



サクラの花



タンポポの花・綿毛



ツクシ



ツバメの子育て



モンシロチョウ



ベニシジミ



ウグイスのさえずり



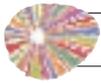
マンサクの花



ホトケノザの花



デイゴの花



ホームページをリニューアルしました!

対象の生き物を見つけたら、ホームページ、携帯電話、郵便もしくはFAXで情報をお送りください。新しくなったホームページでは、より楽しくご参加いただけるように、写真やコメントも投稿できる報告機能の追加、対象生き物の詳細を解説した図鑑ページ、集まった生き物の情報から作られるいきもの地図、特集コンテンツなどの機能が盛りだくさんになりました。

詳しくは、ホームページをご覧ください。

<http://www.mikke.go.jp> でも検索できます!



いきもの図鑑のページ



対象の生き物を見つけれられる地域や時期の目安、観察ポイントなどの情報を見ることができます。セミ類や鳥類は鳴き声も聞くことができます。

みつけ報告

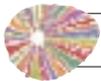
見つけた生き物の写真やコメントも送ることができます。



いきもの地図のページ



全国から集まった情報は、いきもの地図上にリアルタイムに表示されます。みんなで、生き物でにぎわう地図を作ろう!



いきものみつけ手帖を作成・配布しています!

いきものみつけ対象種30種の写真や特徴、みつけられる場所や時期が載っている図鑑つきの、楽しい手帖を作成しました。いきものみつけ事務局で配布していますので、

全国の小中学校の授業や自然観察施設などの自然観察会などで、ぜひご利用ください。

フィールドにちょうどよい
ポケットサイズ

対象の生き物の観察ポイント



生き物を見つけたら、
メモをしよう!

いきものカレンダー

いきものみつけ事務局

いきものみつけ手帖は、事務局までご請求ください(送料をご負担いただいています。10冊以上の送料については事務局までご相談ください)。

●電話番号: 03-3568-4131 ●E-MAIL: info@mikke.go.jp

センターの出来事

1 生物多様性センターのマスコット、ズックちゃんの着ぐるみが完成しました!

生物多様性センターのマスコットキャラクター「ズックちゃん」をご存知ですか?ズックちゃんは付近の森に住むオオコノハズクという小型のフクロウをモデルにしています。たいへんな物知りで、頭に七色に光るアンテナが付いているのが特徴です。当センター内をあちこち飛び回っていて、お客様をお迎えしたり、生物多様性について説明したりしています。

この度、ズックちゃんのきぐるみが完成しました。これから、各種イベントの折、あちこちへ出かけて、会場を盛り上げるなどスタッフのお手伝いをします。みなさんと仲良くなりたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。



2 各地のイベントに参加しました



新宿御苑みどりフェスタでの様子

生物多様性センターでは、皆さんに生物多様性についてより理解していただきたく、春から夏にかけて、各地で行われる環境系イベントにブース出展いたしました。4月29日に新宿御苑で行われた「新宿御苑みどりフェスタ&国立公園フェア」では、「生物多様性」についてのパネル展示や、クイズラリー、簡易顕微鏡を使った土壌動物の観察コーナー、新宿御苑内の自然観察ツアー等、盛りだくさんの内容で来場の皆様に楽しく生物多様性について学んでいただきました。6月6~7日に代々木公園で行われたエコライフフェアにおいてもパネル展示や、簡易顕微鏡を使った観察コーナーなどを出展しました。

多様性センターでは、こうしたイベントに積極的に参加し、たくさんの方々へ「生物多様性」や生物多様性の保全への取り組みについて知っていただけるような普及活動を続けていきます。

3 生物多様性センター常設展示室改修に伴う閉館について

生物多様性センターの常設展示室は平成21年11月2日(月)から平成22年1月まで閉館いたします。新しい常設展示室には、平成10年の開館時から増えた各種調査の成果、環境省の活動、日本各地で行われている保全活動の紹介などの展示を加え、子供から大人まで、生物多様性を知り、楽しみ、ご自身の環境保全活動に繋げていただくために、各種情報提供端末、トピックパネル、動かす展示、セルフガイド(日・英)なども準備いたします。



多様性センターに収蔵している標本の紹介 第17回



オシマルリオサムシ標本(当センター収蔵)

和名/オシマルリオサムシ
 学名/*Acoptolabrus munakatai munakatai*
 分類/コウチュウ目オサムシ科

 歩く宝石

今回ご紹介するのは、日本には約45種(亜種は180以上)が生息するオサムシ科甲虫の標本です。オサムシは地表を主な生活の場としている大型の地表徘徊(はいかい)性甲虫で、一部の種を除いて後翅が退化して飛ぶことができません。主に地表の昆虫、ミズ等を捕食するため、土壤動物の変化に対して敏感に反応する指標生物としても注目されています。また、この甲虫は、何よりもその多彩な体色から、愛好家の間で「歩く宝石」と呼ばれ、昆虫学者ファーブルをはじめ、数多くの人々を魅了してやみません。漫画家の故・手塚治虫氏も大変なオサムシの愛好家で、ペンネームにこの昆虫の名前を取り入れたのはとても有名な話です。

 研究対象として

飛翔能力を欠き大きく移動する能力が低いオサムシは、山脈の隆起や河川の形成といった地理的な障壁の出現により、その両側の集団どうして遺伝的な交流がなくなると、独自の進化を遂げやすくなると言われています。近年の遺伝子研究によると、日本のオサムシ科の起源は①大陸から日本列島が分離した時に祖先種がすでにいたものと②氷期の始まった200万年前から後に大陸と日本列島を結んでいた陸橋を渡って入ってきたものと2つのタイプに分かれていると考えられています。化石からも、約200万年前には

日本のオサムシ相は成立していたと示唆されています。このように、オサムシ科は進化系統学や生態学の研究対象としても非常に興味深いグループです。

 環境指数生物として

平成15年度から開始した環境省のプロジェクト「モニタリングサイト1000」では、オサムシ等の地表徘徊性甲虫を「森林・草原」生態系の調査対象生物の一つにしています。地表徘徊性甲虫は、分解者の一員として林床の生態系に大きな役割を果たしていることがわかっています。また、生産者(樹木)や消費者(鳥類)との相互作用を明らかにしていく予定です。全国各地のサイトから続々と送られてくるオサムシの管理作業等をしていきますと、その特徴的な風貌と多彩な体色に作業を忘れてついつい見入ってしまいます。



ピットフォールトラップ=地上徘徊性甲虫を捕獲するための罠のことでモニタリングサイト1000ではこの手法を用いています。



全国各地のサイトから集まってくるオサムシ

*参考文献 八尋克郎 編(2008)『オサムシ 飛ぶことをわすれた虫の魅惑』八坂書房、pp.75-78.
 滋賀オサムシ研究会編(2003)『滋賀県のオサムシの分布』琵琶湖博物館研究調査報告20号。



新センター長からのご挨拶

はじめまして、7月半ばから生物多様性センター長として来ました水谷です。この時期に暑い東京を離れられ幸せな気持ちですが、センターが担うべき調査、情報、標本、普及啓発の4つの役割を果たすための課題を前に、気持ちを新たにしています。

これまで、環境省内部や地方自治体で、データのユーザーとして多様性センターの業務を見てきました。その視点を忘れずにデータ収集、提供の仕事にあたりたいと思います。これまでの経験では、必要なときにほしいデータがあることはまれで、しかしデータがないと嘆く必要もなく、既にあるデータから何が言えるかを考える、データをうまく使うことが大事だと思います。ものごとの説明にデータが伴うと説得力が格段に増します。生物多様性の分野でもそうです。そのために先見性をもってデータを集め、わかりやすく公開することを第一に取り組んでいきたいと思っています。今後ともご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

センターの動き

- 4/29 ● 「みどりフェスタ」ブース出展
- 5/12～5/16 ● モニタリングサイト1000第1回藻場分科会
- 5/14 ● モニタリングサイト1000里地検討会
- 5/15 ● モニタリングサイト1000小湊調査分科会
- 5/24～5/25 ● モニタリングサイト1000磯分科会
- 5/27 ● JICA湿地保全研修
- 5/29 ● モニタリングサイト1000高山帯検討会
- 6/ 5 ● 2009 ほたるサミット
- 6/6～6/7 ● 「エコライフ・フェア」ブース出展
- 6/10 ● 地球規模生物多様性モニタリング事業
第1回検討会・分科会
- 6/12 ● 法人設立総会・法人設立記念樹木医講演会
- 6/12 ● いきものみつけWeb分科会
- 6/16 ● いきものみつけ幹事会(東京)
- 6/19 ● モニタリングサイト1000陸水域調査湿原分科会
- 6/22 ● いきものみつけ幹事会(東北)
- 6/26 ● いきものみつけ幹事会(中部)
- 6/29 ● いきものみつけ調査分科会
- 6/30～7/ 4 ● いきものみつけ幹事会(近畿・広島・札幌)
- 7/ 1 ● 全国巨樹巨木の会理事会
- 7/10 ● モニタリングサイト1000(森林・草原調査)
解析ワーキンググループ及びコアサイト・
準コアサイト検討会
- 7/13 ● COP10円卓会議
- 7/17～7/20 ● 第1回アジア学術振興機関長会議共同シンポジウム
- 7/21～7/23 ● アジア太平洋地域における生物多様性観測
ネットワーク化のための国際ワークショップ
- 7/27～8/ 3 ● インターン生受け入れ
- 8/ 2 ● 生物多様性まつり2009
- 8/12 ● いきものみつけ幹事会(第二回東京)
- 8/24～8/28 ● JICA生物多様性情報研修システム

案内図



発行：環境省自然環境局生物多様性センター

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾5597-1
 電話：0555-72-6031 FAX：0555-72-6032
 URL：http://www.biodic.go.jp/

※ニュースレターは下記URLからもご覧いただけます。
 URL：http://www.biodic.go.jp/center/news/